

がんばれ！ ふるさと

～完全復興 三宅島・東日本・伊豆大島～

主催 鶴吉プロダクション／平成 26 年 8 月 17 日 17 時～／角筈区民センター

日本舞踊家 鶴吉さんの呼びかけで多数の出演者によりチャリティティーイベントが盛大に行われた。一部の「復興トーク」で、ふるさとネット佐藤就之会長に三宅島噴火災害を報告する機会が与えられた。

佐藤会長の報告

会場みなさん今日は、本日は、三宅島噴火災害についてお話をする機会を頂きまして有難うございます。主催者の鶴吉さんを初めとして出演者の皆さまには、長年大変お世話になっております。この場をかりまして、あらためて御礼を申し上げます。

三宅島の噴火は、平成 12 年(2000)6 月 26 日に「嚴重警報」が発せられ、7 月 8 日に雄山噴火。噴煙は 800m から 1 万 4000m にも達し低温火砕流も発生しました。これは、地球の大気圏を突破する高さで、東京にも火山灰や火山ガスの悪臭がしました。

そして 9 月 1 日突然明 2～4 日間に「全島避難せよ」との指示が出され島民は、着の身着のままで 1 都 18 県全国に分散避難を余儀なくされました。この全島避難は、平成 17 年(2005)2 月 1 日によりやく解除。実に 4 年 5 月ぶりの帰島です。

この噴火災害前には、約 3,800 人の島民が住んでいました。それが全島避難中に 200 人が亡くなりました。また 500 人の方々が就職、病院、特養老人施設に入所や子供の就学のために家族が別居し三宅島籍を離籍しました。その上、全島避難指示解除でも 500 人以上が帰島できませんでした。帰島者は、家屋の再建、健康状態、高濃度地区、就労、子どもの就学(就学児 7 割未帰島、家族別居)などの条件により左右されました。9 年目の現在でも横ばい状態で、2,600 から 2,700 人台に止まっています。このように島民の約三割弱、一千人が避難先に止まっているわけです。

避難解除当時は、島の雄山・高濃度地区など 45%が住居・立ち入り禁止。家屋、電気製品、自動車などが火山カス・二酸化硫黄放出のために腐食してしまい、日常品の取り換え、家屋も建て替えや修繕が必要でした。帰島するためには、被害の比較的少ない地区でも最低 1 千万円前後は必要としました。また事業所も再開できない場合が多く、働く職場も少なくなっていました。

深刻だったのは、4 年 5 ヶ月の長期避難生活で貯金もなくなり、帰島後の生活再建費など減少し生活保護に頼る世帯も避難前の 17 世帯から 98 世帯に増加しました。そして半数が帰島できませんでした。

「帰りたくても帰れない島民」が1千人、この人たちに対する支援も打ち切れ情報もなく、東京砂漠の片隅で孤立をしてしまったのです。

私たちは、「帰りたくても帰れない島民」を放置し、帰島できて良かったとして避難中の苦労を忘れるわけにはいきませんでした。

避難指示解除を前後して、帰島島民と帰島できなかった在京者並びにボランティアとマスコミ、専門家の人々に広く協力を求め「三宅島ふるさと再生ネットワーク」を立ち上げました。在京者の訪問活動やふれあいコール支援、三宅島新報発行とホームページで全国に情報発信、各種イベント企画や被災地との交流、島の再生・復興などの活動を、皆様からご寄付を募りながら続けています。

来年2月で帰島10周年を迎えます。

会場の皆さまに「三宅島 観光復活へ光」見出しの8月12日の読売新聞夕刊一面と三宅島新報第50号記念号をお配りしていますのでお読みください。

三宅島の再生・復興のためには、まず観光業、水産業、農業を柱に努力中です。

皆さん。ぜひ三宅島に来て島の人情と自然を満喫してください。このことが長期噴火災害地三宅島を励ます第一歩です。

先の東日本災害支援のNancy 榎戸さんのお話のようにボランティアの支援を受けて、被災地は頑張っています。

また、首都直下型地震や東南海地震が近いと言われています。「災害は忘れたころにやってくる」そして「明日は我が身」かもしれません。お互いに絆を結び、支えあう行動こそがこれからの日本にとって最も大切なことではないでしょうか!

たくさんのご来場の皆さん。そして鶴吉さんはじめ出演者とスタッフの皆さん、ここから深く感謝を申し上げ、ご報告と致します。ご清聴ありがとうございました。